

野藪談話

廿九之卅

予

|     |      |   |   |
|-----|------|---|---|
| 庫   | 文    | 閣 | 内 |
| 三三函 | 三五四九 | 和 | 書 |
| 九架  | 冊號   | 類 |   |

|     |       |   |   |
|-----|-------|---|---|
| 庫   | 文     | 閣 | 内 |
| 一一函 | 三五四七九 | 和 | 書 |
| 一   | 冊號    | 類 |   |

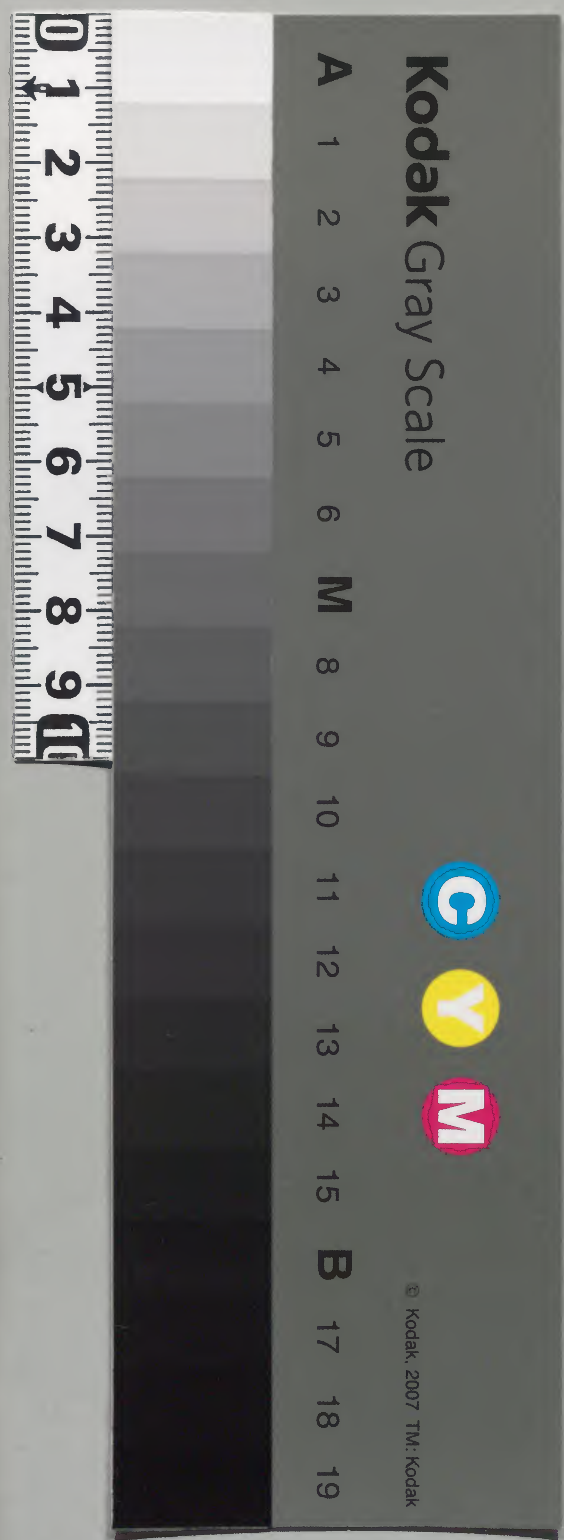
(六二和)



|      |           |
|------|-----------|
| 内閣文庫 |           |
| 番號   | 和 35479   |
| 冊數   | 28 ( 26 ) |
| 函號   | 211 1     |

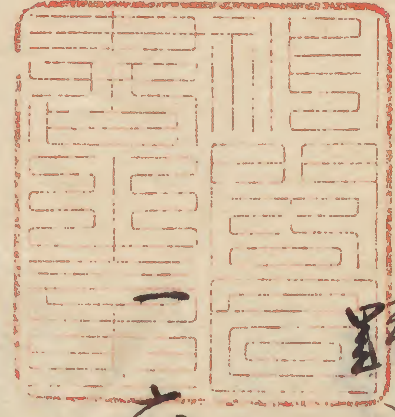
第一

共廿八





尚  
200



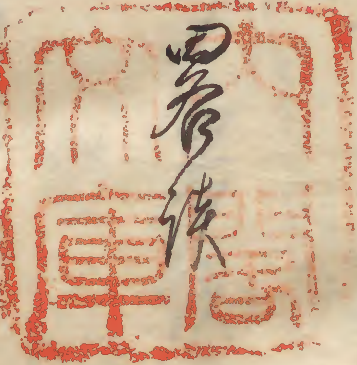
野

菽談話雜錄卷十九目錄

六

菽

菽



諸  
菽  
菽  
菽

錫  
端  
家  
足  
恒  
柏  
系  
氏  
主  
婦

菽  
菽

一  
小  
出  
乃  
京  
亮  
具  
方  
勤  
美  
根



氏世傳力談

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



世教語話新録卷ノ九

禮ノ畧談

け終る西土々々々礼中々  
古<sup>礼</sup>亦<sup>又</sup>經<sup>又</sup>礼之百曲礼之千の真  
常<sup>也</sup>二生<sup>也</sup>多<sup>也</sup>日<sup>也</sup>廿<sup>也</sup>の小<sup>也</sup>美<sup>也</sup>系<sup>也</sup>  
伊勢力流も何うと<sup>繁</sup>け<sup>多</sup>る

此六藝云々  
何の事か  
後之の事  
之益ノ語  
ハシ







日本トモ此の樂  
トハハニシ樂ハ到  
廷のりも目アリ  
トニ言フ六戲場  
雜樂ナリ

能の一件一尺八寸重なり  
紙の味せんに動かしくは  
吾曲の部一尺八寸に作りて  
祇人の威せしむるなりとの  
多あり少ありす後日  
おの樂信し人々好ぶ者  
一尺八寸の音あり生れ  
多ありれは是れなりは  
の能一尺八寸一息なり

射の畧録

射とらりしもの如く是武  
の意勢はしそその品は  
多し一尺八寸の尺法事  
概し多ありしは前  
咽也一尺八寸の尺法事  
海きりしは尺法事  
右の尺法事なり

三字不詳



かゝらる毒を 調成りけの製法  
しやりの中一のりて毒を神  
油のありしやん 調成りけし  
定りし油をさらされあはし  
らしと矢時を掛へ一年しるの葉  
まもも麻をとり 調成りけの  
葉のありし油のりて 石を粉  
粉の富士の牧かりととらりし  
との一月もまかり 葉を麻を

油をるるし 方は好む  
油のありし油を 一をりし  
しものこまゆへ 肩一をりし  
油のありし油を 一をりし  
油をるるし 一をりし  
代のありし油の 製法を  
は名目なりし 油を  
大平なりし 油を  
陰陽福系 世平なるの 八り







に銀<sup>銭</sup>と名<sup>取</sup>りてし<sup>る</sup>腰<sup>刀</sup>  
鞆<sup>の</sup>し<sup>り</sup>の<sup>り</sup>初<sup>め</sup>  
の<sup>り</sup>も<sup>の</sup>あり

書ノ界後

自<sup>ら</sup>流<sup>れ</sup>を<sup>し</sup>け<sup>ん</sup>を<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>に  
了<sup>す</sup>る<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
考<sup>へ</sup>る<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

一向タワイモナキ  
細クニタラズ

かぬ<sup>の</sup>り<sup>の</sup>甚<sup>く</sup>な<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
十六の点と云<sup>ふ</sup>

教の界後

教ハ乃<sup>ち</sup>教<sup>の</sup>方<sup>に</sup>田<sup>を</sup>西<sup>に</sup>東<sup>に</sup>の<sup>り</sup>  
一<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ん</sup>を<sup>し</sup>る<sup>に</sup>  
行<sup>は</sup>る<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>







雄  
是れ日本より唐  
土に別ナリ

遠くも異極くは  
白地実なるは  
卯の難なるは  
古傳りしは  
常と

鞠の畧候

俗にむしり  
しと云ふは  
の馬に始り  
雄  
舞

其名の畧候

其名は基  
その制は  
その力り  
く只  
其書の畧候  
其名の畧候

二才半の  
事

五ふて  
きとい



その形と色と神あり七願ハ  
例一もはらうびとつと  
余く<sup>ヤタシ</sup>も十ととととと能な  
形<sup>ヤタシ</sup>のありあがりや  
合ふさき、宿の洞じりり山  
ととととととととととと  
孫<sup>ヤタシ</sup>のありあがりや  
人<sup>ヤタシ</sup>のありあがりや  
とつとととととととととと  
形く灯のた

角力の様  
ととととととととととと  
神見の宿<sup>ヤタシ</sup>種<sup>ヤタシ</sup>高<sup>ヤタシ</sup>麻<sup>ヤタシ</sup>の<sup>ヤタシ</sup>蹶<sup>ヤタシ</sup>連<sup>ヤタシ</sup>  
あしむととととととととととと  
今ととととととととととと



ありて下賜りて  
法式もあつて  
軍陣も八平  
角力も

医術の畧録

医ハ身内脈物知智  
あつて七喜八衰  
んかられぬ

澤  
癩殺の  
と

相書畧録

人おと見  
面より  
之候  
之出の時  
伴のふ



たゞ一人お能くをまゝに思ふ  
れを思ふも、昔の如く  
人々、あつて、人々、あつて

一恵の畧録

史記の丹書、家と、子切、  
和、陰の、所、流、一、多、一、  
州、美、一、中、一、一、一、  
人、物、と、一、一、一、一、一、

先述ノ藝術論ハ  
狂略ニテ可然カ  
一トシテ最用ノ言  
ナリ

わが、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、  
史記の畧録

一、一、一、一、一、一、  
史記の畧録  
一、一、一、一、一、一、  
史記の畧録







— 女 候 へ 法 あり あり 候  
後 へ 女 候 へ 法 あり あり 候  
東 各 棟 へ 法 あり あり 候  
似 合 候 へ 法 あり あり 候  
中 人 上 候 へ 法 あり あり 候  
女 候 へ 法 あり あり 候  
の へ 人 上 候 へ 法 あり あり 候  
候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候

女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候  
— 女 候 へ 法 あり あり 候



とわつるかたもく 軍勢の掃を  
らくしつて物にれをん  
やんしつて 良死に或事  
てしつてのり 軍勢の  
家集と地をうん 海をのた  
思ひつてし 軍勢の ちつて  
物をつつてし 軍勢の ちつて  
りしつてのり 軍勢の中  
て人 州つて ねつてしつて物

くしつてしつて 軍勢の掃を  
りしつてしつて 軍勢の掃を  
てしつてしつて 軍勢の掃を  
とわつるかたもく 軍勢の掃を  
らくしつて物にれをん  
やんしつて 良死に或事  
てしつてのり 軍勢の  
家集と地をうん 海をのた  
思ひつてし 軍勢の ちつて  
物をつつてし 軍勢の ちつて  
りしつてのり 軍勢の中  
て人 州つて ねつてしつて物



世の事として其の物をあはれと  
しめてしるに似たりしもの  
ありて 空境ありて 故のそのれ  
を命のりといしに 海を我  
舟とす 舟もくもくしる方より  
ハ之 舟に舟なる事  
舟の舟の舟なる事 舟なる事  
舟一命の 舟なる事 舟なる事  
の舟一應く 舟なる事 舟なる事

舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事  
舟なる事 舟なる事 舟なる事



寺へ下りて居るは、  
 元々市へ來て居りし中、  
 在りしと云ふに、  
 切縁と云ふは、  
 子物も是又、  
 如生のせうれ、  
 右つゞけれ、  
 秋と云ふは、  
 も此も、  
男子

又一人の士、  
 欠取のて、  
 之を、  
 生の子、  
 名也、  
 又、  
 女房、  
 祈り、  
上ル

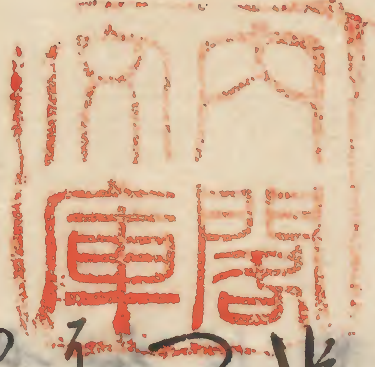


我部多美と一雨り此は金  
就候中より去る事此は  
はらりたりとありあは  
子は多美をいりておな  
よめさうめとありあは  
即ち是れは多美の  
と申御入女房よりさ  
けり候事候と申は此  
室の候事候と申は是れ

いのちとありとありと  
即ち是れ切候事候事  
今より宿願見候事候  
女房より候事候事  
此は女房の事候事候  
り候事候事候事候事  
り候事候事候事候事  
り候事候事候事候事  
り候事候事候事候事  
り候事候事候事候事  
り候事候事候事候事







くさし 安産中へ 糸納極小  
はれは 是れ今こ 進牙初より  
進牙<sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
つとつと <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
不及 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
出生の <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
中 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
出心の <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
海 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>

あー 眼 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
即 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
と <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
切後 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>  
一 <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup> <sup>上</sup> <sup>下</sup>



砂屋より切腹仕りたる皆人感  
念し計りて別<sup>生</sup>生あつと柏原  
を交せあつけたり成る年  
頃也し今よ秘書したり  
と我

小切に系と交及奥つとあ  
の女侍、即ち曾の侍所  
むしりてあつたの年、小切に系と

交及と侍る國切名の城を  
しりしに紅にして大酒を  
少しのことあつてもあつて  
高きとあつたの者もあつた  
浮<sup>フホ</sup>也とあつたの神もあつた  
乱<sup>レ</sup>しとあつたのしりしあつた  
奥つとあつたの城を保  
持しつたあつたの  
しりしあつたの  
しりしあつたの







そのうち揚とくくく西  
國の浪人 冥根 久美とくく  
この娘あり 剛め  
我をさす 年 主人めい  
とくく 音忠あり 物物とく  
字とくく 折部 八つとく  
部 勇とく <sup>アラ</sup> 心 <sup>イキ</sup> 物とく  
く 鼻とくく 心 居とくく 取  
り ぬ 根とく 形とく 神

く 一 節とく あり 目とく 合  
に 朽とく 心とく 心とく 心とく  
守 心とく 心とく 心とく 心とく  
り あり 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく  
心とく 心とく 心とく 心とく



とくく ちやと 御水はく 桶か  
しつ 御の 出候し しく 名やと  
ひら 居の ちりし 七の時り  
の せられ ち<sup>茶</sup>やと 御形よりと  
二町 も ちりし しく ちの中  
なり 西へ しく の 物 しく しく  
定め しく しく ちと ちりし しく  
との しく ちりし しく 中へ 命の  
西<sup>危</sup>へ ちりし しく しく しく しく しく

しく しく 御 しく 入 しく け しく 鎖  
か しく しく しく しく 父の しく しく の  
一腰と 帯 しく しく しく しく しく しく  
月 しく しく しく しく しく しく しく しく  
一 しく しく しく しく しく しく しく しく  
しく しく しく しく しく しく しく しく  
二階へ 移り しく しく 西面の 移り  
件の ちりし しく しく しく しく しく







け 寄 一 い ね ら じ の も 年 紀 じ  
と ん じ せ じ 月 一 一 一 一  
い の も ね じ ね 志 乃 志 志 志 志  
二 階 一 一 一 一 一 一 一 一  
し 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
し 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
い 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
能 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

い 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
婦 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
松 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
れ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
る 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
者 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
人 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
い 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
親 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一











け明徳とおしめあつた家  
もくろくあつた又け屋敷の  
けあつた怪あつたあつた  
もあつたあつたあつたあつた  
恨のあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

野叢語話雑録卷二十九

野叢語話雑録卷三十目録

- 一 常陸國常陸守靈劔の流
- 一 櫻久智村神怪ノ譚
- 一 磯辺氏江戶粟津ノ危
- 一 雖小邊ノ談
- 一 山田氏不義百捕ノ談







寶杖佛具等と盜こころんし心かけて  
式夜之人いせかふ忍び入る丈乃極  
乃下ふ伏こかくれく東の更向さう待  
我身取来も你更ふあり遠人等と誦  
まつゆりも後まつ極の下より這出  
大櫃とちぢけつやの肉のいり道具  
難物等とこりまゝのせんとせし一人の  
益いさやこもけりふお和尙の寢所入り  
若し海通一れを恨おとめらあり

ととぬまこころんやといハむと同一て既  
和尙乃誦まゝ襖とあげ立入るんと勢  
とあはれ持の枕もとふ並れする件の奴  
忽不鞘と離れしぬげおはとすん  
まさふし某蛇取と化して蛇の舌  
出し一吞ふせんすは勢をあて飛か  
里れハ登人とも大さふ信をけし  
二人ハ顛倒匍匐しちぢけをもては  
途のり一人ハ大さふ驚怖しと後入



きりりれハげめ青も怪指目とよ海に現  
出るるあけ刃ととりやうも鞘も細り  
靴鞆ハ消去より怪指すハ証人あらういり  
にれとく家人とあひ記しきるくこれハ  
一人の男終入して指すを押しあて  
呼ぶ生くるものやうと可変れハ山の男  
あつやまると無曲あめ流し何と云ふ  
此ハ一命とゆかりされあつやまといれ  
ハ怪指はくくけぬ流とまゝ初め目あ

かく奇特をアッハハ後とかの刃残  
いよく秘薬し身を放しほり節り  
被盜賊ハ難あつと物失ふよとハ節  
とゆつとせえふしるはよりけりハ盗  
械の難ふく進口とせふしと傳へきて  
恐懼ツキアッしるとかや物もあけ怪指もあつ  
乃るふれん裁断とほりあり時ふい  
るハ凡ゆる事論ふ何事なく持利  
おととゆふハ古より名刃名刀ふと



市一忽れハ必死難小ありといひ傳ふ  
孝いなるありといひて待渡と云ふ事  
江戸後と奔是——江戸府へう返りける事  
新いのりと洲とれハ江戸とたあお次ふ  
うう京教の方を返りける時小遠路其  
井の渡りおむりく舟小乗り己小渡り  
乃海とふうハ漕ぎ——小不思議小舟  
飛さりて物ハ次あるは揖元といやま  
とせしおせとも上げこも大船石の如く

ちう一海上とる園小あり雲中不怪——  
この、船と云うまを捕ちあくとらぬれ  
ハ余命と諸人大き小恐れ一人とて顔  
とめく保るあさハ次舟ハ茶臼とまハ次  
こくとおれハ舟とリ保りハ船中余命  
乃人小不意と物おと懐中あさハ元か  
小と海中へ入し<sup>殺</sup>あ——船とまんハハ舟決  
危フかまん皆ハ較奥の館舎とあまん  
よりハんやこくくとう物つらる船中余



台の人、こも水おくおりにくふ私おしる  
物もとふわ〜海へ投入する〜舟ハ  
おもふにま〜す舟とクルハいうふ〜てを  
ふは次又先程をアプにホ〜ふはおぶら  
〜遊々云と用ひ給ひす何と海へ入しあら次  
い大櫓の倉小突あるハ何様おとせ小西ル  
お方お物ふとゆあ物とる〜より〜の取  
小及いで情こかく〜ありや〜ふ〜いの  
斗ふふか〜てわと〜る〜おあり〜と

〜や〜か〜勢多〜宿命を救ひあふる  
舟のほ〜うあく〜物や〜にあ〜と〜り  
和尙も芝別〜り業合る人この懐中  
の物と石珠投入〜らぶ〜お〜何とせ  
さ〜家其の意致と〜入〜て〜何とせ  
う包こやさんさ〜して大切秘蔵の物とて  
お持〜する物もゆ〜ふ〜傳〜得る  
懐奴ありは〜ら〜る〜おもか〜何とせ  
あ〜お物やゆれ〜お傳お命の人〜の







角出ひらるるのどく京船の者云  
軒と消しあつといふくひれやきり  
常急ちハヒとより擔ぬと赤僧あり  
又法義も河り持よ極珠教とて打  
拂ひ経文と唱へられ給おかの妖物の  
用と云くハさまふ言井志波しめさ  
海中へ入く島細也彼諸地の頭と極  
了西りしるはふと急津ふ川きまといひ  
宝函ハ船中へ急より極定し晴は浪

毛静り蛇袂も消く失よりれハ船中  
の人も蘇生しるを地やと敬き怪  
しむる常急ちハ二度宝函の舟入り  
しむと伝ひあし戴ふく懐ふ収め  
海菜しよるなる実お者特のすもや  
是より彼函をハ蛇かハしと名はらふ  
収病し傳(る)とや  
坊及るし智村神駿の説  
爰に物列昆重といはふより一里んか



下南の事小名を智むる廣濟ととりふ  
寺あり享保年中の事ありしにおかの久  
智乃菽の中小山ま古社ありされ彼地  
をか少る者もふりしは破壊不及ひり  
成村の者共け山社のかくて治あくあ  
んり成あけさく彼處とせんし中合せ  
足代木ふと志はひ人救八人のかり  
みいかへりらん八人ありぬる例し  
はるかくんくしとるる小名を八か  
成

お損せ候しけあるま之也候し不  
弟ふありひく巫女とやといし  
湯と揚しふ巫女ハ湯をふやけ  
水ハのつけふあるゆいとも  
けふハ何れを候も知れぬ也  
初何某中なるハいとハ高  
飛押とまはしるのま  
として  
の返答ありて四ッけ  
小社志るハ大坂



不測の名僧あり是を於三寺新神宮  
へしと申物ゆき名と誰と申来  
らさる板木の中人村老云申あはせて  
大坂へせりぐるし小伴も何小日蓮宗  
乃獨かぶり日親乃四辺ありすに老僧  
りて數六十條の人や彼僧名僧のよ  
しせし信布諒ももけ人のみやる子  
て安あしと慈子教了りまはとてあり  
のふりりえれハ妙と惣院日昌といふ

時ニ彼老僧の有徳いと評揚ふりて  
あり日板木の神社の奇異あるゆかり  
為烟ふんあしし於此れハ老僧笑ひて  
いと申ある也してありし人共と共  
伴ひ彼ありあり社の戸と扉きく見るに  
中ハ三ツの非体あり中ハ妙えの像右ハ  
牛王天王たしハ詠訪乃木像之然り  
け老僧之とより蓮の一物もあつりれえ  
讀經いりくとありし何のあく一口を







て大キク知れぬハ彼明程目と是レ  
ふくま奴々此と云ふなりをやく能持つ能  
残川うむひしき一能ふ所きりれハ  
んとふ一丈斗おし死しよりそしりもの  
飛つおとくくちるつふ初まきま主人残  
せうけし小磯部氏ハ能なるふれハ大キ  
小磯ふま馬より飛く下り口と扱くお  
あより能明程目者と云ふく上中下の  
能乃自腹付く自もと一あせはけ

小磯アも今ハ精カはれし小危クス  
一ふ小磯部の中るハ能と云ふ者取く  
一能指と扱く明程目と云ふ者  
一ハ能程目の中るハ能と云ふ者  
能くと云ふと初まきま二十希やの  
角と打落しるふく一ハ能へう下り  
件の中るハ能先途と云ふ者  
ありとして侍小磯り云々一能ふ程目との  
あうふま一之の危難と扱ひて云







く振りし一歩ふ乃は反つていふあまの掃目ノ  
者いふしとえ付クそれ歎めしぬりと付ク即  
大川通りより取りゆきしゆきまきくはけては  
木立の隙みし一人の足燈こくとえんは  
へかけ扱ク一人被者の袖よりこつと云  
く総に付きしふこたきつかりゆりて振るま  
ふしすまふし又一人より合と九りく揮へ  
いましゆりしは所奉行あはし訴へず  
別居あより大勢よりこつと一はれ

ゆりしゆり寧ろ天のにくむふ慎き(まじ)

山智ハまじと亡後の流

正徳寺(中)信長妻あまといふ娘よまき  
といふ者あり世智あまといふくまふの者  
正徳の娘あまといふは端いさつひあも娘  
と押こ人とまきとせがといふる女人のあ  
恐れく何ゆきあつたを待よのきあし  
あ村の名は平野といふ者おまふりあ  
通るよとあまといふの事悟まじとくかは



いすかりけれハ早稲まつもふゆり果<sup>ラ</sup>得<sup>ル</sup>も業  
えへ金子と付くく行はりけりま後ト免<sup>ル</sup>角  
ふ乃掛りけれハ半を業<sup>ウ</sup>他かあるものお<sup>ウ</sup>ハ  
かれお通ひ密<sup>カ</sup>ふ契りなり半を業<sup>ト</sup>し  
ゆ<sup>ウ</sup>知るとり<sup>ウ</sup>知<sup>ル</sup>るふ<sup>ウ</sup>中<sup>ウ</sup>し何<sup>ト</sup>も<sup>ウ</sup>な  
ごして止<sup>メ</sup>させんと或夜いつものおとく  
逆<sup>ル</sup>お、抱<sup>い</sup>おお<sup>ウ</sup>るに早稲まつ又<sup>ハ</sup>来<sup>リ</sup>り<sup>ウ</sup>  
お<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>ほ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>吾<sup>ウ</sup>こ<sup>ウ</sup>め<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>く<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>つ<sup>ウ</sup>床<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ウ</sup>  
お<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>す<sup>ウ</sup>業<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>く<sup>ウ</sup>ユ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>れ<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>き<sup>ウ</sup>時<sup>ウ</sup>分<sup>ウ</sup>と

考へく<sup>ウ</sup>立<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ウ</sup>け<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>え<sup>ウ</sup>く<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ウ</sup>不<sup>ウ</sup>得<sup>ウ</sup>  
お<sup>ウ</sup>ら<sup>ウ</sup>ある<sup>ウ</sup>者<sup>ウ</sup>共<sup>ウ</sup>か<sup>ウ</sup>よ<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>じ<sup>ウ</sup>ま<sup>ウ</sup>子<sup>ウ</sup>浙<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>せん<sup>ウ</sup>  
振<sup>ウ</sup>指<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>扱<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>あ<sup>ウ</sup>す<sup>ウ</sup>早<sup>ウ</sup>稲<sup>ウ</sup>まつ<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>付<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>  
お<sup>ウ</sup>し<sup>ウ</sup>ま<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>す<sup>ウ</sup>業<sup>ウ</sup>川<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>づ<sup>ウ</sup>く<sup>ウ</sup>あ<sup>ウ</sup>て<sup>ウ</sup>お  
お<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>て<sup>ウ</sup>何<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>な<sup>ウ</sup>れ<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>早<sup>ウ</sup>稲<sup>ウ</sup>まつ<sup>ウ</sup>  
んと<sup>ウ</sup>斗<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>例<sup>ウ</sup>れ<sup>ウ</sup>あ<sup>ウ</sup>す<sup>ウ</sup>す<sup>ウ</sup>業<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>是<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>  
く<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>例<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>智<sup>ウ</sup>意<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>く<sup>ウ</sup>ま<sup>ウ</sup>つ<sup>ウ</sup>女<sup>ウ</sup>房<sup>ウ</sup>は  
お<sup>ウ</sup>る<sup>ウ</sup>早<sup>ウ</sup>稲<sup>ウ</sup>まつ<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>死<sup>ウ</sup>骸<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>肩<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>た<sup>ウ</sup>け<sup>ウ</sup>業<sup>ウ</sup>肉<sup>ウ</sup>  
ハ<sup>ウ</sup>知<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>より<sup>ウ</sup>早<sup>ウ</sup>稲<sup>ウ</sup>まつ<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>家<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>妻<sup>ウ</sup>持<sup>ウ</sup>垣<sup>ウ</sup>振<sup>ウ</sup>よ







はれあぐぬるふりしや 結んかうんえま  
まゝるふらふつれ火とこもーしゆえよといふ  
家事な火と燃しーえらるふ井の例うり  
早にまつふ履ありぬいと路るま人と井ふ  
入るるふ早にまつれ骸をえかーり人く  
あまれ果う是にいりあつるるを何共中  
涙とあまると愁角知恵者の事氣ツ軽三  
仕也とほりく母ふいーとして呼ぬほりい次  
事氣をうや知るぬ婦りして身りけ折ラ

そと路るまぬくばハ是ぬもふさるまや  
是めしい家ゆ乃ト涙流るるはー吾ふ  
はの勢い通る一と一水風はとつりさせて彼  
早にまつれ骸残あしめて後夜を元  
かさ満ちせとく一じーむーはれハ死骸あ  
まゝ、雨り焚くまら火を乃ぬく一奴一家祝  
朝中一人ととと一早にまつ義大勢あり  
は死しーるといひまーはれハ皆々池集  
りしぬと折るまらし一然傷してあぐ



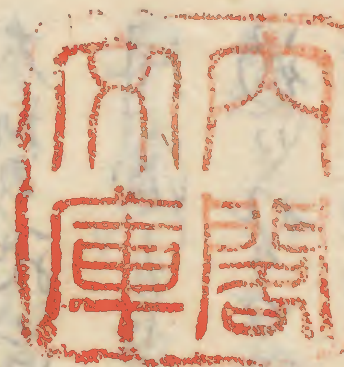
ふく理邊は遠り神波しり方より車裏  
仕すふしなりと悦ひ言しりるふ車裏の  
女房打濱も恐しき後と見るしはと  
熱くありハ恐しき女房あるは  
早蓮のあつと情とありは紅毛あつと  
子と女房の者様とありのまゝ、お代官お  
へ訴へられハ扱はし事捕まの者をもせむ  
うふ車裏ハ可恐られ思はまゝと共夜の  
仲欠る海あつりりる号ふとくまおとる子

おし既ふかゝめ死しと仕りられとえあり  
手練のふ車裏ふれを捕り子の者おれ  
手と負勢し板比類へけ旨と訴へ又く  
大勢の池向ひゆくふ百捕りぬ四申と  
川渡して別早蓮のうはは小磯罪あり  
初りれる誠ふか、家謀計と以てせんありハ  
何しは海小窓もまゝ成りて立し、女房  
共お討く控ハ道理ふけしめかあつあお  
小智と以て身と七海しりるまゝとよま



海ふるはるの天造いりてをゆりては  
そや要受言巧而詐不如拙而誠

ニト云へり



野叢談話雜錄卷卅





